

Co だより

学級開き～子どもの「このクラスでよかった！」が聞こえるクラスを～

全世界で 400 万部を売り上げた、世界的ベストセラー「世界最高の学級経営 the FIRST DAYS OF SCHOOL —How to be an effective teacher」では、成果を上げる教師の特徴として、次の三つを挙げている。

1. 子どもの成長を大いに期待している。(マインド)
2. 学級経営がすばらしい。(環境)
3. 子どもの学習を促す指導計画を心得ている。(計画)

日本の教師は、「教育＝授業」「教師力＝授業力」と捉える傾向がある。成果を上げない教師は、ネタ・指示・発問など見えるものに注目し、それを駆使して子どもを動かそうとする。その結果、子どもの後を追いかけて回すことになるのである。

この本の中で作者は、最初の1週間で最も大切なことは、「一貫性」を確立することだと指摘している。

「学級開き」で最も有名なのが、向山洋一氏の「黄金の3日間」〔Co だより選集4ページ(第32号)参照〕である。向山氏は、学級作りの法則の中で次のように言っている。「この場合、大切なことは何かというと、始業式からできる限り早い時期に組織するということである。遅くとも一週間以内、できれば、三日間で組織してしまうことである。これは、どれだけ強調しても強調しすぎることはない。」

昨年4月最初の Co だよりで紹介した野中信行氏の「3・7・30の法則」でも野中氏は「3・7・30の法則」の法則を「学級の仕組み(システム)を作るための法則」と言っている。

これらの主張を鑑みれば、成果を上げる教師の学級開きにおける関心の重点は、初日のLHRのネタよりも、一週間から三ヶ月くらいのスパンにおける、一貫性の確立にあると言えそうである。

つまり、学級経営成功の鍵は、子ども集団の組織化にある。学級経営とは、目的を達成させるための環境整備のことで、その成功の中核に、子ども集団の組織化があり、子ども集団の組織化は、一貫性の確保によってもたらされるということが言える。

向山氏は、「組織すると動きはスムーズになる。動き方、ルールが決まっているので、誰でも身を処して行ける。心地よい流れが生まれるのである」と組織化の要を話している。野中氏は、「子どもたちが、朝学校へ来てから帰るまでの学校(学級)の仕事を決めてしまうのである」と言っている。ルールというとペナルティが伴うような印象があるので、「手順と決まったやり方」または「共通の行動様式」と言い換えてもよい。

この時期に教師ができることは、ルールの確認とやり直しである。だからこそ、丁寧な指導が必要になってくる。

ルールの定着に先んじて重点的にやっておかなければならないことがある。「信頼の獲得」である。信頼のない人が何を言っても尊重されることはない。これは、1年間やり通さなければならない。指導の徹底は、信頼の継続があって初めて成功するのである。

<参考文献>

授業力&学級経営力（明治図書）2020年4月号 NO.121

「世界のクラスをつくるために学級開きでやるべきたった1つのこと」上越教育大学 赤坂真二教授

新任・若手の先生に贈る「せんせい通信」

私自身、20年以上担任をしてきた。その間、いろいろなルールを考えた。必ず入れたルールは、次の「叱る三原則」である。

- ① 命に関わる危険なことをしたとき。
- ② 他人を傷つけて喜ぶようなことをしたとき。
- ③ 3回同じことを注意しても直そうとしないとき。



なぜ、叱らなければいけないか、児童生徒に考えさせる。「クラスで危ないことをして、人を傷つけて喜んで、全然注意を聞かない人がいるとします。叱られないとしたら、どうですか？」と生徒に問えば、必ず、適正な答えが返ってくる。厳しさも、「安全・安心」を確保するためであり、ルールは、教師のためにあるのではなく、生徒のためにあるのである。

子どもの心に扉があるとすれば、その取手は内側にしかついていない

人が、自分の不適切なところを何とか治したいと考えるときには、「適切な自己評価」がスタートとなる。行動変容には、まず悪いことをしてしまう現実の自分に気づくこと、そして自己洞察や葛藤をもつことが必要である。自分はどんな人間なのかを理解できることが前提となる。

自分が変わるための動機付けには、「自己への気付きがあること」、そして様々な体験や教育を受ける中で「自己評価が向上すること」の二つが必要である。我々は叱責や説教よりも気づきの場を提供しなければならないのである。

自己に注意を向けさせる方法として、自分の姿を鏡で見る、自分の声を聴くなどの方法がある。教師が「あなたをみていますよ」といったサインを送るだけでも効果があるが、同級生に言われて得られる気づきの方が効果が大きいため、少人数のグループワーク等が効果的である。加えて、平生から、我々大人が正しい規範を見せることが重要である。



知的障害のある生徒の中には、「こんな問題もできないのか」と馬鹿にされてきた経験をもつ生徒も多い。人の役に立つことが、自己評価向上への近道である。障害はあっても、「人に教えてみたい」、「人に頼りにされたい」、「人から認められたい」という気持ちを強くもっている生徒も多いのである。

<参考文献>

宮口幸治著 ケーキの切れない非行少年たち 新潮社 2019